

我々三人は、いま考えてみると高校生にしては、おませな会話をしていたものだと言憶する。先ず、「出家とその弟子」（倉田百三）や「三太郎の日記」（阿部次郎）を話題の基本とし、自分たちは大学を出ること。結婚は二十七、八歳が望ましいこと。業種は何であっても定年前に子どもの大学教育を終わらせていること。（この頃の定年は普通五十五歳であった）定年後はそれぞれの趣味を楽しむこと。七十歳を一応他界の目安とすること等を、生真面目になって議論していたのである。大学進学さえ到底無理な境遇にあっては、夢物語の理想を語り合うしか、自分たちを慰める手段がなかったからだと思う。誰に教えられたわけでもなく、人の生涯とは未完成で生まれ、未完成で終わるものと漠然と承知しながら、夢を語ることは刹那にしてみても喜びであった。私にはもう一つ目を開かせてくれた一冊の本があった。手にしたときは、表紙も奥書きもなくて書名は分らなかったが、後に曾先之撰そうせんしの「十八史略」と知った。これは「トム・ソーヤ」（マーク・トゥイン）を卒業していた自分にとって渴望の甘露であり、無手勝つの勇氣になったことは否定できない。

M君はその後、夜間高校時代の勤め先であった歯科医師の養子となり歯科医師になった。歯科大時代の技歯づくりは、教授も一目置くほどの腕前だったそうである。考えてみれば、彼は中学校卒業以来大学卒業まで、歯科技工士一筋の仕事だったのだ。私に想い出させる彼の姿は、技工室で黙々と入れ歯を作っている姿しかない。たまに会いに行っても彼が技工室から出られるのは、いつも夕方の遅い時間であった。歯科大通学の条件付とはいえ、養子とは名ばかりで檻に入れられた働き手で、医院にとっては労働力でしかなかったのだ。人生経験の少ない私にさえ、この医院の雰囲気の異常さに気づいていた。彼は歯科大卒業後研修期間が終わると同時に、養子縁組を金銭で解消することとし、旧姓に戻して開業した。私は、日ごろ従順でおとなしい彼の、どこにそんな勇気が隠されていたのかと驚いた。男の決断は蓄積されたエネルギーが限界に達したとき、大きな爆発を伴うものだということを知った。返済額はかなり高額であったが、彼は彼の精神を縛っていた縄を断ち切り、大空を舞い、大海に乗り出せる自由を獲得した。

街場に降りた前任者は内科だったので、あらゆる患者が来た。この鉾山^{やま}は半年間、雪で陸の孤島となる。この鉾山^{やま}の人々とその家族

にとつては無理もない、彼一人が命の綱だったのである。彼はある人のお世話でここで結婚した。雪に埋もれた診療所の前で、二人が写っている写真が送られてきたが、奥さんは若く可愛らしい人だった。やがて三人の子どもにも恵まれたが、偶然にも、私の三人の子どもたちと全く同じ歳の生まれなのである。一男二女である。

時は移り、松尾鉦山は閉鎖され、彼も鉦山やまを下りることになった。彼は盛岡市の中心部の内丸に歯科医院を開業した。彼は博士号も取得し全ては順調だった。その矢先、診療中に倒れたのである。奥さんから県立F高校にいた私に電話が来た。午後の新幹線で駆けつけたが、彼は昏睡状態だった。奥さんは二日後手術すると話してくれた。私は一週間後にまた来ることを告げて帰ろうとすると奥さんが病院の玄関まで送って来てくれて「難しいんです」とつぶやくように云った。

十日後、彼に会いに行くと、病室には「面会謝絶」という張り紙があったが、奥さんの計らいで入室することが出来た。彼は頭に白い帽子を被ったように包帯をしていたが、ベッドに横になっている彼と話は出来た。私は「あまりしゃべらないように」と言ったが、彼の会話は元気な頃と変わらなかった。冗談を云って他人を笑わせ

るのが得意な人だったのだ。帰り際に「じゃあ、また来るよ」と言う。「今度は俺の方から行くよ」と云って彼は笑った。歯科医としての診療は出来なかったらしいが、順調に快方に向かっているように思われた。

そして二年後、彼は突然、郡山市の私の家を訪ねてきた。私と家内は驚いたが、驚きはこれだけではなかった。彼がお土産だといって私に残していったものは、彼が新婚旅行の時に記念に買ったというエメラルドのカフスセットとネクタイピン、家内には同じように綺麗なネックレスだった。こんな高価なものを受け取りを躊躇している私に、彼は「あの時の上着と時計のお返しだよ」と云った。学生時代のことですっかり忘れていたが、そういえば彼が大学生の頃、高校時代に着ていた色褪せた余りにもわびしい学生服姿を見て、K君と相談し、質流れの上着と安物の腕時計を渡したことを思い出した。あの時は礼も碌に云わなかった彼であったが、二十年以上も心の中に温めて置くほど、感動していたのだとこの時に知った。彼は一晚泊まって帰ったのだが、我々はこれが形見の品になるなどとは夢にも思わなかった。彼の死は、それから一カ月半後だった。彼の前頭葉癌は、手術では摘出できない場所に病巣があったのである。

これは、彼が亡くなった後、奥さんから聞いたことだが、彼は自分の墓をすでに建て、曹洞宗の「報恩寺」というお寺さんから戒名まで貰っていたというのである。しかも、医院は処分し、その現金のお金を奥さんに渡し、その夜、風呂に入り、そこで亡くなったという。死亡診断書は溺死であつたと云う。入浴中に意識が無くなつたのであろう。何という亡くなり方であらうか。彼は医師だつたから自分の死を予見出来た、と言つてしまえばそれまでであるが、これは物語以上の物語である。四十三歳で岩手の土になつたのである。葬儀での私の弔辞は言葉にならず、ところもかまわず大声で哭ないてしまった。遺影から感傷が引き出されたわけではない。私の人生からかけがえのないものを奪われたような寂寥感に包まれたからである。人間は必ずこの世から消えるという約束のもとに登場する。考えようによっては、四十三歳と百歳はほんの僅かな違いなのではないのか。人間の真の死は、すべての人々の記憶から消え去ったときにはじめて訪れる。彼の早すぎた死は、情緒や情念を超えてあらためて「生」の意味を考えさせてくれた。私はあの世へ行っても忘れることなく、どんなに大勢の人がいてもきつと君を探し出すだろう。

彼は釣りをしたことはなかったであらう。彼との会話の中で、釣

りという言葉を一度も聞いた記憶がないのだ。彼は忙しく短か過ぎた生涯の中で、釣りなどする暇はなかったのだ。何ら殺生せつしようもしない彼を、天はなぜ早く連れていってしまったのだろう。殺生せつしようずくめの私は恥ずかしくて身を小さくするばかりである。

私はM君やK君と出会わなかったら、大学には進まなかっただろう。三人は、授業が終わり部活の練習後、あり金を出しあって三十円の回転焼きを食べ、番茶ばんちゃのひとヤカンながじりを空にするまで飲み、青春、ただ中なかの話を夜更けまでした。長尻ながじりの我々を回転焼き屋の老夫婦は決して追い出すようなことはしなかった。私が私自身を自覚したのは、この回転焼き屋さんの小部屋だったのだと思う。少年は青年になりつつあった。対人恐怖症もだんだん良くなった。三人はそれぞれの悩みや苦境、恋の話までした。重い荷物を背負っているのは、自分だけではないことも知った。

あれから五十数年を経た今でも、あの回転焼き屋さんの建物は、あの木枠の窓がアルミサッシに変わったただけで、生花屋なまばなやさんの倉庫として使われ、周囲がすっかり変わってしまった中で、一軒だけ奇跡的に記念碑のように残っている。「久栄荘」の老夫婦は、あの時の回転焼き屋さん老夫婦の面影を何故か彷彿ほうふつとさせるのである。